

雑誌に描かれた「写真小説」 —戦時下の漫画と映画—

牛田 あや美

はじめに

本研究は「戦時下の漫画に描かれた戦地及び植民地の表象研究」において現れてきたテーマである。日本のストーリーマンガは手塚治虫が確立したと考えられている。その手法は映画のモンタージュを活用し、登場人物の動きを表現させたとい一般的にはいわれる。手塚以前の漫画研究に関しては、まだ手つかずのものが多い。そこで、手塚が子どもの頃に読んでいたであろう雑誌のなかに描かれていた漫画、その周辺にストーリーマンガに関する何らかの秘密があるのではと調査を始めた。これは二〇〇九・二〇一〇年度に「映画評論・批評の系譜」において科研費の助成を受けた際、戦前の雑誌を調べたことがヒントとなった。

「ストーリーマンガのコマはいつ頃でてきたのか」の調査過程で、戦前の子ども雑誌をめくっていた際、一九三二（昭和七）年一月号『少年倶楽部』にて掲載された「写真小説」というジャンルをみつけた。題名は「明るい教室」。原作は池田宣政、またの名は南洋一郎。戦後、子ども向けにモーリス・ルブランの「怪盗ルパン」シリーズの翻訳と脚色で一世を風靡した作家である。戦前から、子ども向けの冒険小説家として活動しており『少年倶楽部』の常連作家であった。

「明るい教室」

「明るい教室」は朝鮮からの転校生、金くんを中心に小学校を舞台とした学園ドラマである。当時の時代背景を鑑みると物語内容も興味深い、ひとまず「写真小説」というジャンルを調査した。名前の通り、写真に小説がついているものである。「写真小説」という言葉が目新しいと感じなかったことから、とりたてて興味は惹かれなかった。

ところが誌面には「監督 松竹蒲田撮影所 齋藤寅次郎」と明記があった。

「写真小説」に映画会社と映画監督が名を連ねていた。

「明るい教室」は一九三二年一月から五月号まで連載され、少年倶楽部写真部が撮影をしている。当時、映画は「写真」とも呼ばれていた。そこで映画化された「明るい教室」を『少年倶楽部』の誌面で掲載していると推測した。なぜなら映画雑誌では、映画作品を「写真」と「文章」で語る手法が度々用いられたからである。

例えば一九一八（大正七）年四月号の『活動画報』では「写真小説」というジャンルで映画「毒煙」が掲載される。「毒煙」は日活の向島撮影所で製作され、オペラ館で上映された作品である。一九一八年一月号の『活動之世界』では「写真小説」でなく「写真物語」となっている。オペラ館で上映された「女一代」、三友館で上映されたアメリカ映画「侠探偵」を掲載している。上映日時と照らし合わせると、雑誌では二、三ヶ月遅れで「写真小説」「写真物語」とし、映画の「誌面公開」が行われた。

オペラ館や三友館に足を運べない観客に対し、他の映画館や地方での巡回で同作品を上映した際の宣伝のためかと考えた。しかし「写真小説」「写真物語」は、映画の一場面がスチール写真で掲載され、物語のあらすじが最後まで書かれている。つまり読者に対し、映画館への誘い水として機能していない。逆に、わざわざ映画館へ行かずとも読者を「映画をみたような気分」にさせる誌面作りである。そのことから「明るい教室」も映画化した作品をそのまま誌面に掲載したのではと推測した。

齋藤寅次郎は、エノケン、ロッパ、アチャコなどの人気芸人を主演とした作品を得意とし「喜劇の神様」ともいわれた監督である。また、写真に載っている小学校の先生は、いかにも当時の役者顔をした俳優である。しかし上映日時を調べると記録にない。もちろん戦前のことゆえフィルムが紛失している可能性も大きい。

「明るい教室」は『少年倶楽部』で連載した際、「写真小説」というジャンルであった。しかし一九四三（昭和一六）年、東栄社から池田宣政名義で書籍を出版した際は、写真は掲載しておらず、文章のみであった。かろうじて読者に具体的なイメージを表している絵は、漫画家の横山隆一が装幀した箇所のみである。書籍の「明るい教室」は映画化された作品なのか。

「写真小説」の始まり

厳密なかたちで「写真小説」の始まりを特定することが困難であることから、国会図書館にある資料を参考に繙いてみた。

時事新報社が出版していた子ども向け雑誌『少年』のなかに、一九〇六(明治三九)年一月号、永洲・作「写真物語」をみつけることができる。一月号は「写真物語(上)」、二月号は「写真物語(下)」、「写真」にまつわる兄弟の物語である。当時の時代背景が反映された作品である。兄弟の父親は日露戦争開戦から満州へ出征している設定となっている。この作品は、「明るい教室」のような「写真」で物語る「写真小説」「写真物語」ではない。ジャンルとしての「写真物語」ではなく、単に小説の題名である^①。読み物に挿絵を添えた、当時から人気であった「絵」のある物語と同じである。

しかし、挿絵との違いは「写真」を模写したような描き方という点だ。「写真物語(上)」は、暗室で写真現像をしている場面がある。その暗室のなかには、いままさに現像している写真のイメージが描かれる。登場人物の現状と、彼らが現像している写真とを一枚の絵におさめている。

当時、読み物に挿絵がつく場合、連作で挿絵を掲載するのではなく、「一枚絵」で表現することが多かった。物語の一場面を切り抜き、文章を補完する機能を果たしていた。絵本のような型ではあるが、「絵」でなく「文章」を重視した型である^②。文章を細かく切った、現在のストーリーマンガのような型でもない。例えば見開き一頁のうち、右頁は全面「文章」、左頁は全面「絵」が描かれる。文章が続くなかで、途中に「絵」を一頁、挿入するというものである。文章が主体であり「絵」はあくまで「おまけ」という描き方である。『少年』に描かれた挿絵のレイアウトも、当時の読み物同様「絵」はあくまで添え物である。しかしながら、この作品は「写真」の物語として創作されているからか「絵」にも力が入っている。

「写真」ありきの「写真小説」というジャンルでは、創刊間もない一九二二(大正元)年九月号『少女画報』のなかに「飛行機」という作品をみつけることができる。この作品は、子ども向け雑誌の「写真小説」として現段階では最初に確認できる。

一頁のうち、五分の四を写真が占め、文章は五分の一である。写真は三枚掲載され、それぞれに文章がついている。三枚の写真のレイアウトは上に一枚、

下は左右にわかれており、右に一枚、左に一枚ある。物語は次のように展開している。

(上) 治子さんは飛行機が好きで、「ああ、何化して立派に飛ぶ様な物を作って乗って見たい。」と、寝ても起きても其事許り考えて居りました。

(右) 熱心は恐いもので、種々と工夫を凝らして居る中に、遂う遂う立派に飛ぶ物が出来ましたので、

(左) 早速お父様にお願ひして大きな物を造へて頂き、都の空高く昇りますと、其面白いこと東京市中は勿論のこと横浜までが眼の下に見え、道を歩いて居る人はまるで蟻の様!^③

映画のモンタージュ効果とまではいえないが、物語を分割し「絵」でなく「写真」で物語を進めている。

「絵」が主体となり物語が展開していく、ストーリーマンガの原型ともいわれる「正チャンの冒険」が『アサヒグラフ』で始まるのが一九二二(大正十一年)である。「正チャンの冒険」の一〇年も前に、物語を分割した「写真小説」が登場している。

「飛行機」は二頁の作品で、治子さんが夢から覚めるところで物語は終わる「夢落ち」の典型的な話である。

おそらく「飛行機」以前にも「写真」を使用した「写真小説」は存在していると推測できるが、現段階の研究ではこの作品が最初となっている。

「飛行機」が掲載された一九二二年九月には、日活の前身となる日本活動写真会社が設立されていることも注目したい。誌面上に「写真」で物語という手法と日本の映画会社の黎明期と重なっている。

物語か、記録か。

一九二二年の『少女画報』は、九月号から一二月号まで「写真小説」を掲載している。一〇月号では二頁増え、四頁となり「友の命」が掲載される。「飛行機」同様、写真をもって物語を進めている。一頁のなかの五分の一が文章で、五分の四が写真である。今回も一頁三枚の写真で構成しているが、前回とは配置が異なり、上・中・下となっている。ここではじめて写真撮影をした

「中村鏡仙」という名前が載る。「写真部員鏡仙撮影」という掲載を他の号からみることが出来る。写真撮影を誰がしたかということは、この時代の雑誌ではほとんど不明である。そのなかでカメラマンの名前が記載されているのは珍しい例である。

同じく一〇月号には「絹布はこうして出来る」という記事が掲載される。蚕から糸を引き出し、それが織物になる過程を写真が追る。構成は「写真小説」と同じであるが、小説のようなフィクションではなく、記録である。また、一月号には「館林の一日」という記事が掲載される。三輪田高等女学校と上野高等女学校が、館林へ修学旅行へと赴いた一日の出来事を、順番に「写真」主体で構成している。この記事は「絹布はこうして出来る」と同じような構成である。「絹布はこうして出来る」と「館林の一日」は、「写真小説」とはジャンルだてしていない。構成は「飛行機」や「友の命」と同じであるが、物語ではない。「絹布はこうして出来る」と「館林の一日」は記録である。時間通りの流れに沿った構成である。

この時点の『少女画報』では、記録か物語かで「写真小説」としているか、そうでないかを区別していると推測できる。フィクションでないにしても順番を写真で追っていく「絹布はこうして出来る」「館林の一日」は「動き」のある構成である。

一〇月号には「女学校の授業」という記事がある。構成はやはり同じで、三枚の写真を上・中・下にわけ配置している。上の写真は日本橋高等女学校のお作法の様子が写し出される。中の写真は大阪夕陽丘高等女学校のお裁縫の様子。下の写真には奈良女子高等師範学校付属高等女学校の球竿体操（明治時代に普及した体操器具を使用）の様子が写し出されている。三枚の写真はそれぞれ女学校での授業風景を並べたものである。それをひとくくりにした記事である。つまり記事による流れがなく、仮に上・中・下の順番が変更しても問題のない構成である。

『少女画報』で掲載している写真と文章の構成をみると「女学校の授業」のように流れのない構成が多い。例えば、写真主体の記事がある場合、写真を一頁まるまる使用し、そこに写真の内容を短い一文や短歌、被写体がいればその人物の名前などが書かれるのみである。「女学校の授業」のような同じ種類のものを一頁に掲載し、記事としたものが一般的である。順番という概念はな

く、時間に沿っての「動き」もなく、写真の配置が前後入れ替え可能な構成である。このことから『少女画報』では、フィクションのお話であり、加えて時間に沿った写真の組み立てを「写真小説」とジャンルわけしていることがわかる。

不可解な写真の順番

『少女画報』では「写真小説」が好評であったのか、この後、毎号にわたり掲載される。例えば、一九二二（大正元）年一一、一二月号では、「涙の露」。一九二三（大正二）年二、三月号では「妹の行衛」。八、九月号では「野径の花」と二ヶ月にまたがった連載である。読み切りでなく、継続した読者を想定している。

一九一三年一〇、一一、一二月号と三ヶ月にわたり「初奉公」を連載している。構成は一頁に写真が二枚、上と下の配置になっている。文章は一頁の五分の一のみであり、残りの五分の四は写真である。

「初奉公」は資産家の娘が父の事業の失敗により没落、家族を養うために奉公へいき、最後には別れた母親と一緒に暮らすという内容である。フランシス・ホジソン・バーネットの「小公女」を日本版に落としこんだ物語である。すでに「小公女」の翻訳はされており、これを元ネタにした物語が雑誌で掲載されていたと推測できる。「初奉公」は写真をつけての物語展開であることから、読者には具体的な物語補充ができたのではと考えている。

『少女画報』ではこの後も「写真小説」は続き、一九一六（大正五）年四月号から「迷子札」が連載される。「迷子札」は一九一二年に日本活動写真で製作しており、上映もされていることから映画をそのまま転用したのではと想ったが、確認はとれなかった。

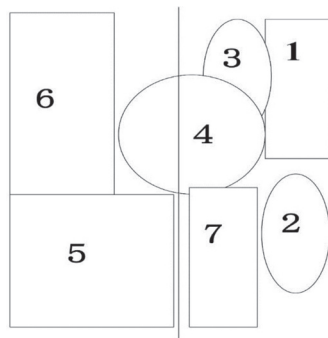
時代が進むにつれ「写真小説」に掲載される写真は、「飛行機」の頃より技術が進んでくる。見開き頁にまたがっている写真、四角い写真だけでなく、丸い写真、人物をくり抜いたものなど、様々なかたちでお話を語る。

「飛行機」の頃は、複雑な写真の並びはしていないが、「迷子札」になると複雑な写真構成をするようになる。この並び順は、戦前の漫画の形態に受け継がれていたのかもしれない。文章は通常の右から左へと流れているのだが、補完する「絵」や「写真」の配置は自由である。前回の紀要^④にも記述したことで

あるが、ストーリーマンガ以前の漫画は文法がなかった。現在では一頁のストーリーマンガを右、左に読み、そして下へと進んでいく。下に進んでも、右、左の順番は崩れない。

しかし、ストーリーマンガの文法が確立される前は、そのような文法はなかった。右一頁、左一頁を使用し、見開きで読ませることが多かった。「迷子札」も同じような形態である。写真をみる順番がふられているからこそわかるが、もし順番がなければ当時の読者でも順番はわからなかったに違いない。写真の並びは次のようになっている。

- 1、右頁右上
- 2、右頁右下
- 3、右頁左上
- 4、右頁、左頁にわたる真ん中
- 5、左頁下
- 6、左頁上
- 7、右頁左下⁵⁾



話が進むにもかかわらず、前頁に戻る。なぜこのような写真構成をしたのかは不明だが、昭和に入り、少年少女誌で漫画が盛んに掲載されたときには、すでにこのような奇妙な構成が行われていた。

同時代の「写真小説」

『少女画報』だけでなく、他の雑誌での「写真小説」も調査をした。

一九一三(大正二)年七月号の『少女の友』では「若葉の露」が「写真小説」として掲載される。八月号では「浅墓あさむらな妹」、九、一〇月号で「母のまぼろし」と、写真が主体となった物語を展開している。しかし、これら三作品は、物語がほとんど進まないことから、同じようなカットが連なっており、時間をかけて写真を撮ったという形跡のない構図である。内容は『少女画報』同様に家族の話を中心とした典型的な「お涙頂戴もの」である。

一九一三年六月号の『日本少年』では「絵具箱」が、十二月号では「少年画家」が掲載されている。「少年画家」は面白い配置で誌面を飾っている。作品

は四頁にわたった構成である。しかしその四頁には「少年画家」だけでなく「ベースボール」という作品も同時に掲載されている。「ベースボール」は「写真小説」というジャンルではない。一頁に二作品を同時に掲載している。「少年画家」は「写真」が主体となり物語を進めているのだが「ベースボール」は「絵」が主体となっている。異なった作品を同じ頁に掲載し、頁を進めていく方法は、戦前の漫画にはよくみられた構成方法である。

一九一四年一〇月号には「勇ましき出征」を掲載している。第一次世界大戦勃発の年だけあり、少年雑誌は戦時色が濃い。「勇ましき出征」も時流に乗った作品である。使用している「写真」はいままでとは異なり、「写真」の上に「絵」をのせ、まるで絵のようである。人物を「絵」で描いていることから「写真」よりも「絵」のほうが先に目に飛び込んでくる。このような「写真」の使い方であっても『日本少年』では「写真小説」としている。

一九一五年六月号の『飛行少年』では「袁探退治」が「写真小説」として掲載される。翌月の七月号では「爆弾投下」、八月から一二月号までは「空中の格闘」が連載される。「飛行少年」だけあり、いずれも空にまつわる物語である。被写体のなかには飛行機、乗用車、大型バルーンなどが写し出され、少年たちの空への憧れを馳せる手がかかりとなる構成である。翌年の『飛行少年』では「鐘楼の秘密」と「金塊の行方」が連載される。二作品ともに写真主体ではあるが、読み物としても力を入れている。探偵小説の体を成しており、読み応えあるものとして存在している。これこそ映画の転用ではないかと考え、データベースで調べたがみあたらなかった。

「絵」で物語を進める「写真小説」

これまで、少年少女誌は「写真」を主体とした「写真小説」を紹介してきた。ここでは「写真」でなく「絵」でお話をすすめていく「写真小説」あるいは「写真物語」についても記述したい。

「写真小説」を調査するきっかけをつくった『少年倶楽部』のなかからみていく。一九一七(大正六)年一月号から「写真小説」というジャンルがでてくる。「怪潜航艇」という作品である。この作品は四月号まで連載される。

『少年倶楽部』で最初に掲載された「写真小説」は「写真」ではなく、「絵」である。

「絵」には額縁のような枠組みが描かれ、確かに「写真」の様相である。一枚目が旭日旗、二枚目は敵艦への砲撃が描かれている。「写真」を「絵」で描写したような形式をとっている。このことから「写真小説」としているのではと推測できる。

同年の九月号は「磁帽魔」という「写真小説」が掲載される。これも同じく「絵」に枠組みが描かれ、写真の体を成している。「磁帽魔」は画家が落款を押すような形式の描き方であるから、「絵」を担当した画家の痕跡が確認できる。

『少年倶楽部』と同じく大日本雄弁会講談社から出版された『少女倶楽部』の一九二六（大正一五年）二月号には「写真小説」として「悲しみの星」が掲載される。「悲しみの星」も「写真」でなく「絵」である。「写真」を模したというよりは肖像画である。「一枚絵」に小さな物語がついている。なぜ「写真小説」かと推測してみると、物語内容が女優のことからであろうか。この作品には、作者が記載されている。

一九二四（大正一三年）四月号の『少年世界』では、「写真物語」というジャンルで「魔の山の老人」が掲載される。「魔の山の老人」は、作・戸村清風、画・野田二郎と記載がある。この作品は一頁を上・下にわけ、「絵」と「文章」で二分割されている。「絵」と「文章」が均衡を保っている。文章量が多いからか、内容もしっかりしており、冒険小説として読むことができる。

同年の一月号でも「写真物語」で「黒真珠の秘密」が掲載される。「魔の山の老人」同様に、「写真物語」とはうたっているものの、「絵」である。作・木島清、画・野田二郎と記載されており、この作品も一頁を上・下にわけ、「絵」と「文章」で二分割されている。内容はやはり冒険小説である。

時代が下ったからとはいえ、「写真小説」は「写真」を使用しているわけではない。「絵」で物語る「写真小説」も同時期に存在していた。「角川字源辞典」を繙くと次のような記述がある。

「内容物をこの器物から彼の器物へうつす」、これが「写」の一般義である。それから、「書物を書き写す」も「写真」などというのも、ただ「こちらからこちらへうつす」意だけに用いられたものである。

こちらからこちらへと「移す」が、写真の「写す」になったというのは、映

像の勉強をしたことがあれば基本的なことである。しかし、「写真小説」が「絵」で描かれていたのをみたのは初めてである。すでに「写真」が雑誌に使用され、しばらくたつにもかかわらず「絵」を「写真」の代わりとしている点は、ダゲール以前の時代と同じである。

唐代中期の白樂天が唐僧浴交の詩篇に、「写真」の語を使っている。わが国でも平安朝から徳川末期まで絵画的用語として用いられている。

この記述は『アサヒカメラ講座Ⅷ』の写真史年表からの引用である。「写真」を絵画的用語として使用している。大正から昭和初期にかけても依然としてカメラを使用した写真のみを「写真」とは定義づけていないことがわかる。雑誌のなかでは物事を写し取った「絵」もまた「写真」であった。

活動写真物語

「写真小説」「写真物語」は、映画作品の焼き直しを雑誌に掲載したものではないかと最初に推測した。それは当時、「映画」を「写真」と呼んでいたからである。明確に「活動写真」と書いてあれば、「映画」であった。

『少年少女譚海』では、「活動写真物語」とし、映画作品の説明をしている。一九二六（大正一五年）四月号では「大評判の教育新活動写真物語」とし「棄児の天国（すてこのてんごく）」が掲載される。日本では一九二一（大正一〇）年に公開されたチャップリンの「キッド」である。物語を抜粋し、映画のスクリーン写真を使用している。八頁にわたり「写真」と「物語」で頁が進んでいく。八頁を使用しているにもかかわらず、物語は完結することなく終わっている。そのため読者の少年少女は、次はどうなるのかと空想を膨らませるしかなかったのだろう。

次号の五月号で「教育新活動写真物語」として「夢ゆめの国のピーター・パン」が掲載される。いわずと知れたジェームス・マシュー・バリーの「ピーター・パン」である。当時、日本では公開されていないベティ・ブロンソン主演の一九二四（大正一三年）年のアメリカ映画である。「キッド」と同様に物語は途中で終わる。

次号の六月号では「少年・少女譚海」にある教育新活動写真物語」として

「ソバカス拳闘王」が掲載される。ウエズリー・バリー主演で、前年の一九二五年に日本で公開された作品である。同じく八頁にわたる「写真」と物語である。「ソバカス拳闘王」は八頁で物語を終了している。この後も『少女譚海』では「活動写真物語」は続いていく。映画題名が日本語表記になっていることや、短編の作品、いまでは忘れ去られている作品などもあることから、日本で公開したか不明な作品も多い。

また『少年少女譚海』では一九三〇（昭和五）年一月号から「写真小説」というジャンルも掲載される。題名は「火星人の地球襲撃」である。H・G・ウェルズの「宇宙戦争」が元ネタであると推測できる。この作品は「写真」でなく「絵」で物語を進めている。

雑誌により「写真小説」「写真物語」と、「小説」「物語」と異なっている。しかし「写真」「絵」ありきのフィクションである。そこには従来の物語に少し挿絵をつけるという構成ではなく、「写真」「絵」ありきのお話として成立している。

大日本雄弁会講談社の「写真小説」と「写真物語」

前述したように一九一七年九月号の『少年倶楽部』に掲載された「写真小説」、「怪潜航艇」と「磁帽魔」は「写真」ではなく「絵」で物語を進めていくものであった。また『少女倶楽部』では「一枚絵」ではあるが「悲しみの星」が「写真小説」というジャンルで掲載された。

この後、講談社の前身である大日本雄弁会講談社から発売された『少年倶楽部』『少女倶楽部』『婦人倶楽部』では多くの「写真小説」「写真物語」を掲載していくこととなる。それらは「写真」によって物語を進めていく手法をとっており、映画のプログラムピクチャーやテレビの連続ドラマのような形態となっている。挿絵にはできない物語の進め方、挿絵に頼るサイエンス・フィクションやファンタジーではない「写真小説」「写真物語」がある。

『少年倶楽部』では、一九二八（昭和三）年一月号に吉屋信子が執筆した「写真小説」、「長男」が一六頁にわたり掲載される。「長男」は「写真小説」が映画の焼き直しではと考えられる最初の作品である。この作品は「少年倶楽部」が撮影したものと記載がある。しかし、映画会社や監督の名前がない。「写真小説」とは、と疑問に感じた「明るい教室」は、一九三二（昭和七）年

一月号に掲載される。「監督 松竹蒲田撮影所 齋藤寅次郎」と明確に記載されている。物語の最後には次のような記述がある。

こんないい写真物語は、少年倶楽部だけに見られるもので、教育映画でおなじみの、松竹キネマの少年俳優諸君が盛に活躍します。どうぞ次号を楽しみにお待ち下さい。

六ヶ月にわたり連載された「明るい教室」は、右記の引用文から映画ではなく、『少年倶楽部』という雑誌のための作品であると読める。原作の池田宣政は『少年倶楽部』の常連執筆家であり、昭和に入ってからほぼ毎号で小説を掲載していた。『少年倶楽部』で実績のあった作家が「写真小説」の執筆に携わっていた。

一九三七（昭和一二）年一月号からは「写真小説」として「あがれよ煙」が掲載される。作者はサトウ・ハチローであり、当時から人気の作家であり『少年倶楽部』で人気作家であった佐藤紅緑の息子である。「あがれよ煙」は日活多摩川撮影所が演出した「写真小説」である。撮影は『少年倶楽部』で担当している。「明るい教室」「あがれよ煙」ともに、映画会社が協力することにより、いままでの「写真小説」とは異なった作品となる。大きな違いは、俳優の顔を明確に撮影するようになったことである。従来の「写真小説」は文章で描かれる背景を「写真」や「絵」で表しており、話に「動き」をもたせる構造であった。しかし、登場人物の顔に、読者の注目を合わせるという「写真」は、ほぼみあたらない。映画会社が入ったからであろうか、あるいは俳優を使うようになったからなのか、明らかに従来の「写真小説」とはその点が異なる。

「写真小説」は少年向けよりも少女向けのほうが好まれたようで、一九三三（昭和八）年の一月号からは『少女倶楽部』で毎号のように掲載された。『少年倶楽部』では俳優の名前が出るのがほとんどなく、誰なのかわからない。それに対し『少女倶楽部』では俳優の名前が徐々に掲載される。一月号ではサトウ・ハチローが執筆した「道は一つ」が「写真物語」として登場する。作り方は『少年倶楽部』の「写真小説」とさして変わらないが、『少女倶楽部』では「写真物語」となる。ここではまだ俳優の記載はないが、撮影は富士発声映画会社が担当している。

一九三三年一月号では「隣の正ちゃん」が「写真物語」として掲載される。原作は和田邦坊、監督は高原富士郎が務めている。この作品から、配役が記されるようになった。主人公「正ちゃん」は、松竹蒲田撮影所の名子役であった突貫小僧が演じ、もう一人の主役である「初ちゃん」は市村美津子が演じている。彼女も松竹蒲田撮影所の子役であり、小津安二郎の「その夜の妻」、日本初トーキー作品、五所平之助の「マダムと女房」に出演した経歴をもつ。正ちゃんの親方には、小林十九二（こばやしとくじ）が演じ、松竹の名脇役として活躍した俳優の名前があることから、記載してないが「松竹蒲田撮影所」の協力の「写真物語」であることがわかる。

一九三四年一月号の『少女倶楽部』では「友よいづこ」が「写真小説」として掲載される。原作は日本初の女性脚本家の水島あやめが担当している。監督は勝浦仙太郎である。主役を演じるのは松竹蒲田の名子役、菅原秀雄である。「友よいづこ」には次のような謝辞がついている。

松竹蒲田撮影所は、この物語を撮影するために菅原・最上の名子役を出演させて下さった上に、監督から撮影まで、いろいろとお骨折下さいました。お陰さまで全く活動写真と変らない、大変面白いものになりました。厚く御礼申し上げます⁹⁰⁾。

「写真物語」は、雑誌ができる限りの、映画への挑戦であったと考えられる。この後も、松竹少女歌劇団が出演した「救いの紅薔薇」、日活多摩川撮影所が出演した「銀の夕星」、日活東京撮影所が出演した「愛の翼」、新興キネマ東京撮影所が出演した「大空の歌」、東宝東京撮影所が協力した「出征の歌」など、劇団や映画会社が制作をしている作品が続々と連載される。

また同時期に『少女倶楽部』では「写真小説」も連載している。「写真物語」「写真小説」とジャンルをわけているのであるから、何らかの違いがあるはずである。しかしながら、「写真小説」も同じく著名な作家や映画会社が協力している作品も多く、「写真物語」との区別が現段階では不明である。

『少女倶楽部』には「映画物語」というジャンルもある。一九三三（昭和八）年一月号には「乃木大将と熊さん」が掲載され、日活脚本部原案の「映画物語」である。この作品は、一九二五（大正一四）年に日活の大將軍撮影所で制

作された映画そのものである。乃木大将を山本嘉一が演じており、監督は溝口健二であった。「乃木大将と熊さん」は公開してから年月が経ての掲載である。

また「映画物語」のジャンルでは、日活多摩川撮影所で製作した「護国の母」が掲載されている。「護国の母」は、一九三六（昭和一一）年五月七日に公開されている。『少女倶楽部』では六月号に掲載された。また新興キネマ東京撮影所で製作した「父は九段の桜花」は、一九三九（昭和一四）年九月一日に公開され、雑誌では一〇月号に掲載される。このように掲載月と公開月が近く、映画の宣伝となる誌面もある。

二〇一四年、韓国映像資料院から日帝時代の映画が発掘されて話題となった。高麗映画の「授業料」が発見された。『少女倶楽部』の一九三九年一月号にて幻の作品であった「授業料」は掲載された。公開日は翌年、一九四〇年四月三〇日に明治座と大陸劇場となっていた⁹¹⁾。これは、映画上映よりも『少女倶楽部』が先行している。この作品の原作は「京城日報」の小学生新聞で募集した作文において第一席となり、朝鮮総督賞を受けた子ども綴り方の映画化である。後に東映時代劇の悪役で有名な薄田研二が田代先生を演じており、子役には当時尋常学校に通っていた朝鮮の子どもが演じている。このように映画雑誌のみでなく、子ども雑誌からも紛失している、あるいは記録にない映画作品がみつかることがある。

『婦人倶楽部』

『婦人倶楽部』では一九二〇（大正九）年一月号に「写真小説」がでてくる。題名は「朝の波」、岡本霊華の作品で青山三太郎が「絵」を担当している。『婦人倶楽部』でも「写真小説」は「絵」を使用している。「朝の波」は連載のため、その後続いて掲載される。しかし「写真小説」というジャンルを通してはいない。

一二月号、翌年一九二一年一月号では「挿絵小説」と名前が変わり、二月号では「絵画小説」となっている。三月号では画家が吉川保正に変更され、「挿絵小説」と戻っている。四月号は記録がないため不明であるが、五月号では「挿絵小説」となり、六月号では「絵画小説」となっている。同じ小説であるにもかかわらず、ジャンルがころころ変更される。このことから「写真小説」「挿絵小説」「絵画小説」と、ジャンルが確定され、定義づけされていないこと

がわかる。

「写真小説」が連載された同じ時期に「映画小説」というジャンルもでてくる。例えば、一九二五（大正一四）年四月号には「映画小説」として津村京村の「結婚悲曲」が掲載される。「絵」は樺島勝一が担当している。「絵」ではあるが、映画作品の焼き直しとも考えられたことから、データベースを繙いてみた。

しかし、そのような作品はなかった。題名が変更している可能性、フィルム紛失等でデータベースにあがらない作品もあることから現時点では不明である。

同じ号に掲載された「写真小説」は「荊棘の垣」である。作者は異なるものの、同じく「絵」と「文章」形式をとっていることから「結婚悲曲」も「写真小説」としてもいいはずである。しかし、「映画小説」としていることからいまでは紛失してしまった映画化された作品であったか、あるいは映画化する予定の作品であったとも推測できる。

『婦人倶楽部』では一九二七（昭和二）年以降の記録になると、「映画」は「映画」と記載され、誌上映画として映画作品が紹介されるようになる。R・ヴァレンチノ主演の「熱砂の舞」、日本と海外資本との共同で製作された「切支丹お蝶」や「イスラエルの月」「恋愛保険」などの洋画作品を中心に「真珠夫人」など邦画作品もある。一九三三（昭和八）年には、大日本雄弁会講談社社長であった野間清治が書いた小説「栄えゆく道」を映画化した新興キネマ製作の「栄え行く道」が、映画物語とし掲載される。

一九二〇年代後半から大日本雄弁会講談社から発刊された雑誌のなかでは、「映画物語」「映画小説」は、映画化された作品だと考えられる。しかし「写真小説」「写真物語」となると映画化したものの焼き直し、あるいは出版社が独自に映画会社の協力で作った作品と、混在している。

『婦人倶楽部』では、そのような作品がいくつか見受けられる。しかし、雑誌のみでその企画をし、製作したには疑問に残る作品がある。

例えば、一九三四年八月号の『婦人倶楽部』に掲載された「生さぬ仲」である。誌面には婦人倶楽部特写名作写真物語と記載している。一九二二年に大阪毎日新聞で連載され、人気のあった柳川春葉の大衆小説である。幾度か舞台化もされ、同様に映画化もされている。一九二三（大正二）年、日活向島撮影所

で「生さぬ仲」が製作された。一九一六（大正五）年には小林商会でも製作されている。一九一九（大正八）年は、日活にて製作された「生さぬ仲 全編・後編」がある。一九二二（大正一〇）年には、松竹キネマ、日活でも製作され、一年で二本も同じ小説を使用した作品ができた。一九二三（大正二二）年も「新生さぬ仲」と題名が変わるが国活が、もう一本は帝国キネマ演芸が製作している。昭和に入り、一九二七（昭和二）年に賀古プロダクション、一九三〇（昭和五）年に東亜キネマ、一九三二（昭和七）年に松竹キネマが製作している。戦後では一九四九（昭和二四）年に松竹が製作している。「生さぬ仲」は、合計一本が映画化されている。

「生さぬ仲」が『婦人倶楽部』に掲載されたのは一九三四年である。そこで、一九三〇年あるいは一九三二年に製作された作品であると推測した。しかし、どちらも『婦人倶楽部』で掲載された「生さぬ仲」ではなかった。

『婦人倶楽部』で掲載された「生さぬ仲」は「写真物語」となっている。雑誌の「生さぬ仲」の監督は東坊城恭長である。彼は、俳優、脚本家、監督でもあり、戦前の日活大將軍撮影所で活躍した。主役は二枚目俳優として活躍していた島耕二である。

一九三〇年の映画「生さぬ仲」は米沢正夫が監督で、一九三二年の作品は成瀬巳喜男がメガホンをとっており、両作品とも二枚目の島耕二は出演していない。つまり『婦人倶楽部』の「生さぬ仲」は映画化されていないと推測される。

同じく「写真物語」と銘打っている、一九三五年七月号には山路ふみ子主演の「山を守る処女」がある。また一九三五年九月号の「写真小説」となっている「愛の十字火球」では、主役を岡譲二が演じている。一九三六年七月号の「写真物語」は、原節子主演で「俊子の歌」が掲載される。一九三七年の臨時増刊号では「写真小説」と銘打ち、高峰三枝子と上原謙主演の「銃後愛国行」が掲載される。

往年の映画スターたちが「写真小説」「写真物語」に出演している。他にも松竹や日活の当世人気だった俳優たちが出演している「写真小説」や「写真物語」もいくつか掲載されており、それらの作品は、映画化された記録の確認がとれないものが多い。戦時下であることを鑑みると、おそらく雑誌のための「映画」であった可能性が高い。

まとめ

この研究ノートで「写真小説」を調査するにあたり、二つの大きな問題がでてきた。一つ目は「写真」あるいは「絵」を使用した物語も、ストーリーマンガのように動きのあるコマを徐々に使用するようになったことである。戦後にフォトストーリーというかたちで写真で物語ることが雑誌で頻繁に行われた。戦前において報道写真を構成した組写真が発見され、見る写真から読む写真へと変化した。戦時期には、組写真は報道写真として使用され、記録だけでなくプロパガンダとして大いに活躍したことはすでに知られている。

今回、子ども雑誌を中心に「写真小説」「写真物語」を調査した限りでは、フィクションの作品を示していた。本文では「写真小説」「写真物語」のみで調査したが、『少年倶楽部』では、創刊の二年後、一九一六年一月号の誌面上に「活動写真」なるジャンルが登場する。それは映画ではなく、まさしく「動く絵」つまりストーリーマンガの原点ともいえる作品であった。当時はまだ「写真」とはいつでも「絵」を指し示すこともあった。モンタージュのように「絵」「写真」を動かすことを雑誌は挑戦していた。

二つ目は、映画は映画館へ行かずとも雑誌でみた気分になれたのではという問題が浮上した。映画雑誌よりも一般大衆誌のほうがより読者層を見込める。大衆誌に掲載された映画作品は、読み物として機能しており、映画の物語は抜粋され「写真」や「絵」で物語の最初から最後まで読むことができるものすらあった。さらに「幻の作品」をみつけることもできる。大スターが雑誌封切り「映画」にこぞって出演している。もしかしたら映画化されたのかもしれないが、現在では存在しない「幻の作品」が誌面にある。また映画化されるはずであった作品、途中でお蔵入りになった映画もある。

この二点は全然違うベクトルではあるのだが、「写真小説」をキーワードにしたときにでてきたテーマである。まだまだ途中段階のものであり、結論にはたどりつけないが、戦前にはすでにストーリーマンガと、雑誌のなかの映画との関係があったことの手がかりとなった調査である。

謝辞

本稿はJSPS科研費26580023の助成「戦時下の漫画に描かれた戦地及び植民地の表象研究」による研究成果の一部である。

註

- (1) 一九二七（昭和二）年三月号の『アサヒカメラ』では「探偵写真小説」なるものが連載される。題名は「へこみの茶碗」。雑誌が『アサヒカメラ』であることから「写真」を使用していると思いきや、「絵」で描かれている。作者は木下宇陀児、画を担当したのは樺島勝一とビッグネームが揃っている。探偵小説の木下宇陀児作品だけあり、物語の「カギ」が写真となった探偵小説である。「写真」を主題とした「へこみの茶碗」は、本文に記述した「写真物語」と同じ部類である。
- (2) 「絵」を重視した挿絵本は、この後、大正時代に入ると一世風靡する。しかしそれは特定の人気画家であり、多くは「文章」重視の誌面作りとなっている。
- (3) 『少女画報一九二二年九月号』新泉社、一九三二年、頁記載無。
- (4) 牛田あや美「少年倶楽部 復刻愛蔵版」『京都造形芸術大学紀要二〇一三』京都造形芸術大学、二〇一四年、一二八頁。
- (5) 『少女画報一九一六年四月号』新泉社、一九一六年、頁記載無。
- (6) 加藤常賢、山田勝美『角川字源辞典』角川書店、一九七六年、一六五頁。
- (7) アサヒカメラ編『アサヒカメラ講座Ⅹ』朝日新聞社、一九五七年、三三二頁。
- (8) 一九一六年一月号から『少年倶楽部』で掲載された吉田金造の漫画は「活動写真」とジャンルだてされており、映画イコール活動写真という定説も覆ってしまった。
- (9) 『少年倶楽部 一九三二年一月号』大日本雄弁会講談社、一九三二年、九〇頁。
- (10) 『少女倶楽部 一九三四年一月号』大日本雄弁会講談社、一九三四年、九頁。
- (11) 映画雑誌『キネマ旬報』では一九四〇年一〇月号にて「日本映画紹介」のなかで掲載されている。一方、同じく大日本雄弁会講談社から発刊されていた雑誌『富士』では一五頁にわたり、物語の全容が「写真物語」とし記載されていた。しかし、高麗映画「授業料」は結局、日本での一般公開は検閲にかかり上映されなかったようである。